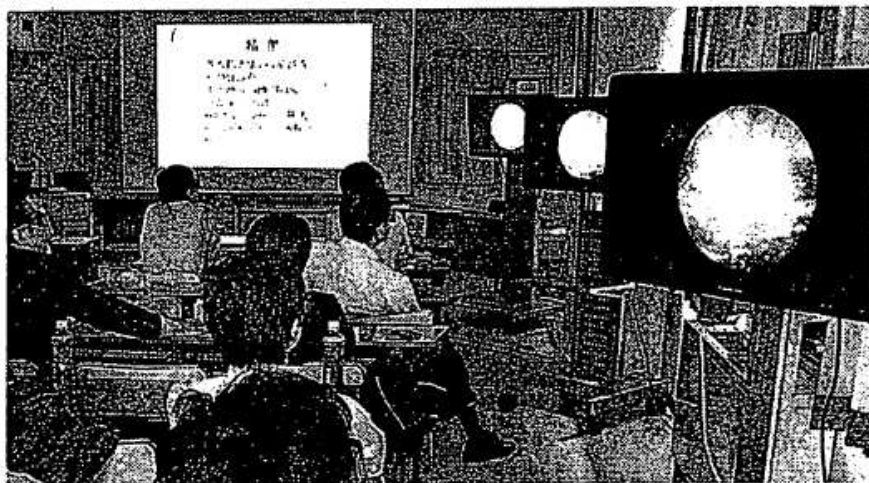


3D内視鏡 手術に活用

奥行きある映像 医師に好評

物体を立体的に見られる3次元(3D)映像技術が、カメラで体内を観察しながら進める内視鏡手術で活用されている。がんの切除や臓器の縫合など細かな器具操作が必要な場面で、奥行き感のある映像は医師にも好評という。実際に機器を使っている関西の泌尿器科医ら約40人が、西宮市林田町の市立中央病院で勉強会を開いた。

同病院泌尿器科の滝内秀和部長(55)によると、3D映像による医療用内視鏡は、1990年代前半に海外で初めて論文が発表された。専用の眼鏡を使ったり、裸眼で見た



立体映像として記録された手術の様子を見る参加者＝西宮市立中央病院

泌尿器科医ら

西宮で勉強会

りするものなど種類はいくつかある。国内の病院に導入され始めた最新の手術支援ロボット「ダヴィンチS」にも、3D内視鏡が装備されている。

勉強会では、前立腺がんの腹腔鏡手術などへの3Dの応用について、医師らが意見を交換。実際の手術の様子も映し出され、参加者は専用の眼鏡を掛けて立体映像に見入った。

手術では緻密な技術が求められるが、実際に使っている医師は「内視鏡の映像に奥行きがあると、直感的に正確な動きができる」と評価。一方、手術結果や時間には3D

とそれ以外で大きな差はなかったとの報告もあり、「3D自体がとつもない効果を持つわけではない」との声も出た。

現時点では、手術自体の効果を高めるよりも、執刀する医師の負担を減らすことが最大の利点というわけだ。

課題としては、立体映像を見続けることによる目の疲れや、平面画像に比べて不鮮明な点などが挙げられた。滝内部長は映像技術や価格面で課題はあるが、3D内視鏡の分野が伸びていくのは間違いない。手術をスムーズに進める技術が広げられ、患者の利益にもなると思う」と話す。

(岩崎昂志)